槇原　茂著『近代フランス農村の変貌――アソシアシオンの社会史――』

上　垣　豊

一貫して一九世紀から二〇世紀初頭までのフランス農村社会史を研究しつづけてきた槇原茂氏が、これまでの研究をまとめあげ一冊の著書として上梓された。日本におけるフランス近代史研究は、一九七〇年代以降広義の意味での社会史が隆盛を見る。当初は都市労働者が対象であったが、女性史、教育史とテーマを広げ、近年では記憶に関わる問題も取り上げられるようになっている。ところが、農民を直接の対象とした研究は意外に手薄であった。そのことを考えるだけで、本書の意義は理解されるであろう。タイトルを裏切ることなく、槇原氏は本書において、社会史的な観点から変貌を遂げていく農村社会の歴史像を提示することに成功している。アソシアシオンという日本におけるフランス近代史研究におけるキー概念を分析に据え、近年流行している教育社会史ともクロスし、読書行為にも目を向け、良い意味でオーソドックスな社会史研究となっている。

まず、本書の構成を見てみよう。

序章――一九世紀フランス農村社会史とアソシアシオン

Ⅰ部　一九世紀フランスの農民と政治

第一章　受動的農民像の克服に向けて

第二章　一九世紀前半の「村の政治」

Ⅱ部　民衆教育運動と農村社会

第三章　一九世紀後半の民衆教育結社運動

第四章　文明化のソシアビリテ――民衆図書館運動と農村――

Ⅲ部　国民統合過程における農業結社

第五章　農業信用の組織化

第六章　バ＝ラングドック地方における農業信用金庫の成立と農業諸結社の形成

Ⅳ部　世紀転換期のダイナミズム

第七章　一九〇七年の南仏ぶどう栽培農の反乱

第八章　カトリックによる結社網の形成

第九章　カトリシズムと農村社会

終章

序章では本書の目的が一九世紀フランス農村が経験したさまざまな社会変動や文化変容を社会史の観点から捉え、叙述することであると、簡潔に述べられている。槇原氏は小田中直樹氏の『フランス近代社会』をひとつの重要な準拠枠として認めながら、従来の近代化論的研究では、近代社会と農村を対峙させ、前者が後者を統合していく過程として近代農村社会史を叙述していると批判し、「ローカルな」「下からの」視点から支配層と民衆の直接的な関係を捉えなおそうとする。その際槇原氏が重視するのが、自発的なアソシアシオンの組織化である。喜安朗氏やM・アギュロ

ンの示唆を受け、槇原氏はソシアビリテのブルジョワ・モデルの浸透、民衆による領有の過程が一九世紀フランスの政治文化の重要な要素であったとする。本書は、このソシアビリテ論を実際に農村社会史の叙述に適用しようとしたものである。氏によれば、名望家は平等主義原理をある程度採り入れた自発的なアソシアシオンの組織化を通じて、ローカルなヘゲモニーの維持を図ったが、保護の性格は徐々に後退し、平等主義的、民主的な性格が強まっていったという。本書では地域の権力システムに関する議論においては操作概念として「アソシアシオン」が、実体概念としてのアソシアシオンには「結社」「団体」という訳語があてられている。史料としては、団体の会報、事業報告、大会報告、機関誌などの印刷史料が用いられている。

以下、各章ごとに見ていくことにしよう。ただし論点は多岐にわたり、社会経済史的叙述も少なくないが、ここは本書の意図に従いアソシアシオンをめぐる議論を中心に論旨を要約することにする。

第Ⅰ部「一九世紀フランスの農民と政治」の第一章では、フランス農民の政治化について丹念に研究動向の整理が行われている。受動的農民像を克服するためにどのようなアプローチが試みられてきたのかという観点から再整理されている。マルクス以来、農村の受動性が前提にされてきた。これに対して修正を加える研究が現れるのは、前世紀の後半以降のことであった。この観点から論点を三点に絞って整理し、さらに新しい傾向としてポストコロニアリズムの影響を受けた研究を紹介している。小括として「農民の一体性」神話の批判、農民の社会的結合関係や儀礼の重視、アルカイスム対近代という二分法に対する批判を通じて、「受動的農民像」が次第に克服されつつあるが、政治化の問題を解明するには、農村におけるアソシアシオンの歴史を具体的に解明する必要があるとまとめられている。

第二章は、南フランス地中海沿岸地方を例にとり、一九世紀前半に生じた農村社会の変化と民衆の社会的結合関係の新たな展開を確認し、これらの社会的現実と全国政治との相互過程を検討している。一九世紀前半を特徴づけたのはサークル、シャンブレといった娯楽のための結社および相互扶助会であった。一八四九年後半以降、共和主義運動は地下運動局面に入っていくが、共和派の秘密結社は、本来は非政治的であった民衆結社を基礎として発展したものであった。他方、同時期には正統王朝派の民衆結社も叢生していた。このように、地中海沿岸地域の少なくとも一部の市町村では相互扶助機能をもった民衆結社がローカルな政治世論を決定づけるうえで重要なはたらきをしていた。この地方では、個人の自発性や公共の議論を重視する政治文化がすでに浸透しつつあったといえよう。

「第Ⅱ部　民衆教育運動と農村社会」に移ろう。ここでは民衆教育結社が扱われている。民衆教育結社は従来、下層階級の社会上昇欲求に応えつつ、公初等教育の三原則の実現に向けて世論形成に貢献した運動であったという見方がもっとも一般的であったが、新たなソシアビリテの創出と拡張という側面から捉えなおされている。第三章では、代表的な民衆教育結社である、ジャン・マセによって始められたフランス教育同盟が取り上げられている。教育同盟は運動の規模のみならず、初等教育の義務化と民間の教

育活動によって民衆の公民精神を向上させようという意志においても、「啓蒙主義的慈善」によって動機づけられていた前世代の教育結社とは明確に区別されていた。マニエ図と呼ばれる識字率分布図を通じての啓蒙活動など「共和主義的習俗」の普及者としての教育同盟の活動が紹介された後、一八七九年以降、世俗学校スー協会などの民衆教育のサークル網を広げていったことが確認される。槇原氏によれば、「教育同盟が構築しようとしていた政治文化」は「下からの個人の自発性に核心をおいて」おり、「共和政下にあっても直ちに国家に回収されてしまうようなものではなかった」のである。

第四章は第Ⅲ部とならんで本書の中でもっともオリジナリティーに富み、叙述にも生彩がある章である。著者は民衆図書館運動を取り上げ、読書行為という社会史の重要なテーマに独自の視点から切り込んでいる。この運動には公民精神、つまり合理主義的・科学的思考や世俗的・市民的モラルを涵養しようという意志が強力に作用していたが、槇原氏はこのような側面を「文明化のソシアビリテ」として把握する。民衆図書館の普及の実態、図書館設立のプロセスなどについて言及された後、農村のソシアビリテと読書行為が論じられ、より「開かれたソシアビリテ」（エブラール）「解釈共同体」（シャルチエ）にもつながるような次元の異なるソシアビリテの可能性が示唆されている。著者は文字どおり民衆の読書に立ち会った活動家たちの経験に限定して、「同伴された読書」という用語を用いて高く評価している。やや理想化しすぎているのではないかと思われる点もあるが、農村における「文明化のソシアビリテ」の担い手たちの実像に迫る魅力的な論考である。

「Ⅲ部　国民統合過程における農業結社」では経済との関連でアソシアシオンの機能が論じられている。第五章では、世紀転換期における農業信用の組織化の全体的な状況が捉えられている。当時農業者に短期的融資を行う一般銀行はほとんどなかった。最初、農業信用組合は民間のイニシアティヴによって組織され、庶民銀行、農業組合金庫、農村金庫に大別される。農村金庫は、教会権威と結びついたローカルなパターナリズムにむしろ依拠していた。共和派政府は、これらの運動による経験を参考にしながらも、政策的に農業信用組合の組織化を推進する道を模索した。とくに信用組合の運転資金不足の問題はフランス銀行が政府に無利子で貸し付けることによって解決されることになった。こうして確立された政府系農業信用金庫が一九〇〇年代には急速に普及し、やがて前述の保守派の信用組合を圧倒していくことになる。ここで留意しておくべきは、政府系の組合といっても組織化では農民の自発的な参加の意志が重視されていた点である。共和派の信用組合は連帯主義を基調とし、その相互扶助的結合は、農業労働者の社会的上昇を助け、社会主義者の進出を阻むものとして構想されてもいた。

続いて第六章でバ＝ラングドック地方における農業信用金庫の成立と農業諸結社の形成が検討されている。この地方は農業信用金庫がもっとも急速に発展した地域のひとつであった。この地方の農業信用金庫の発展においては、国家貸付が決定的な重要性をもっていたが、槇原氏によれば、南部地域金庫の割引率は高く、準備金額およびその自己資本に占める比率がともに全国最高であ

り、国家への依存の強まりと簡単にはいえない。地域金庫は国家貸付の申請や貸与を媒介し、この資金を使っていくつもの醸造協同組合、蒸留協同組合、さらには南部地域保険組合が創設された。こうして共和派の指導者の農業結社構想は次第に実現されつつあった。続いて、こうした動きに先立って成立していたマロサン協同組合（一九〇一年創立）をはじめとする一群の組合の分析がなされている。マロサン村で生まれたマロサン協同組合は、組合活動の一環として「社会的に有用なあらゆる機関」を創設することを目指し、実際にも消費組合、農業経営者組合、労働者住宅協同組合を設立していった。マロサン村で先駆的な協同組合の設立が可能であった要因として、左翼的伝統と都市・農村間の交流の伝統に沿ったものであったことが挙げられる。このように、世紀転換期の農業信用組合の組織化や農業結社運動を、単に経済次元でのみ捉えたり、あるいは国家による一方的な統合のヴェクトルとして捉えたりすることは適切でないことがわかる。

「第Ⅳ部　世紀転換期のダイナミズム」の第七章では有名な一九〇七年の南仏ぶどう栽培農の反乱が取り上げられる。南仏の農村では、遅くとも一九世紀最後の四半世紀までには都市や城邑を中心に、農民が相互のインタレストを確認しあえる状況が用意されていた。このような結合関係を媒介にしていたが故に、都市起源の労働組合運動も比較的容易に農村に浸透しえた。悪徳商人、悪徳地主によって人工的に生産されたワインが市場を圧迫しているとされ、これに対してぶどう栽培業全体での闘争が呼びかけられた。数十万規模の大衆動員や、市町村議員の集団辞職などまさに運動は地域ぐるみの様相を帯びていった。反乱はきわめて組織的な運動であり、近代的な政治手段と交通機関を十分に活用しており、運動の量と質と言う点で、かつての農民蜂起との明確に相違していた。また反乱は急進化するにつれ、オック語の表記が目立つようになり、反乱指導者の地域主義的な発言も見られるようになり、「南仏」を再認識させる地域防衛の運動としての性格を強めていく。なお、クレマンソーの弾圧によって社会主義者と急進派の間の溝は深まるものの、ぶどう栽培農の反乱は、議会における党派間の激しい対立を引き起こさなかった。むしろ注目すべき点は、反乱が党派政治とのかかわりを拒否した点である。

第八章と第九章では、社会カトリシズムが対象に選ばれている。まず第八章では社会カトリシズムによる農業組合運動の背景をなした、カトリック結社網の全般的な動向が眺望されている。激しい対抗意識の下で、社会カトリック派による結社網構築が試みられた。こうした新たな流れを代表したのが、フランス・カトリック青年会ＡＣＪＦであった。カトリック結社運動としてとくに重要なのはパトロナージュ形態の組織であり、一八八〇年代以降、急速に発展していく。パトロナージュは、信者囲い込みによるカトリック社会のゲットー化の方向性をもつと同時に、活動家育成の貴重な場であった。ＡＣＪＦは職業組合や共済組合などの組合組織化による現実主義的な社会改良路線をはっきりと打ち出した。これに対してションは民主主義社会実現の意志を明確にもち、教会ヒエラルヒーから独立した運動であったが、教皇庁の態度の変化によって打撃を受け低迷していく。重要な点は、カトリック結社運動を支えた人びとはもはや一九世紀的な慈善事業家ではなく「活動家」であったことである。

第九章は、世紀転換期に新たな展開を見せる社会カトリシズムとフランス農村との関係に視座が据えられている。社会カトリシズム諸派の農村社会観が丁寧に分析された上で、ＡＣＪＦの一九〇八年のアンジェ大会報告集『農業問題』が分析されている。ＡＣＪＦは観察の方法を採用し、統計資料やアンケート調査を活用してフランス農村社会の実態に実証的に迫ろうとしていたのである。続いて農業組合運動の全般的動向とカトリックの関連が論じられている。初期の農業組合運動の指導者は、その大半が敬虔なカトリック信者であり、労働者サークル事業のメンバーも少なくなかった。政教分離後、司祭は「聖具室の司祭」から「使徒的司祭」へと変わっていった。社会カトリシズムの運動が科学や実証主義のいわばハビトゥスを少なくとも一部の農村青年に植えつけながら、彼らを組合運動などの実践へと向かわせ、名望家の保護＝支配から脱する機会を与えたのである。

終章で、まず大革命後一世紀余りを経たフランスの村々では、複数のアソシアシオンの並存が一般的になりつつあったことが確認される。アソシアシオンは農村の結合関係、全国的な経済的、政治的動向に連結し、その変革を促す触媒としての側面もあわせもっていた。フランス農村において共同性を選びとる機会は確実に増えていた。フランス農村も、個人の自律性を認め、引き受ける多元的な社会へと移行しつつあったとされる。

以上のように、個人主義的とされるフランス農民は二〇世紀において西欧地域でもっとも複雑で、豊かな協同的諸制度のネットワークを誇るようになるが、そこまでに至る歴史的な経過が本書によって明快な形で示されているといえよう。「あとがき」で触れられているように、ジョゼ・ボヴェに代表される現代フランスの農民像とバルザックやゾラによってかつて描かれた農民像の間のギャップを埋めることが本書のねらいの一つであったが、それはおおむねはたされているといえよう。日本における研究史との関連でいえば、以上述べた点に加えて次の点を評価すべきであろう。第一に、共和派とカトリックの対立が党派対立の次元から地方における結社網の対立として、これまでの研究より一段と民衆に近い次元で描きなおされている。第二に、谷川稔氏らによって文化統合の歴史が唱えられてきたが、文化統合の歴史は、ともすると国民統合の観点を強調しすぎる面があった。これに対して、槇原氏はアソシアシオンの解放系のヴェクトルの重要性を実証的に明らかにすることによって、新しい政治文化の普及の歴史的意義を再評価し、共和主義運動に相応しい歴史的位置を与えたと言えるであろう。

このように、本書の意義は高く評価されるべきである。その点を踏まえた上で、若干の疑問点ないし問題点を以下記してみたい。

疑問に思った点の第一はアソシアシオンの概念とそれをめぐる論争についてである。槇原氏のアソシアシオンの定義が明確ではないというのではない。二宮宏之氏の所論に従い、アソシアシオンのもつ統合系のヴェクトルと解放系のヴェクトルに着目して多様な結社を分析していく手法は成果を挙げているといってよいであろう。しかし自らの実証によって明らかにした知見をもとに、槇原氏はこれまでのアソシアシオン論とどのように切り結ぼうとするのであろうか。たとえば谷川稔氏の説との関わりなどを是非ともうかがいたいところである。

二点目は、本書における「政治」の捉え方に関わっている。例えば「dehors des partis」を「非政治主義」と訳されているが、本書を読む限りでは「特定党派へのコミットメントの回避」ということであり、議会政治への期待、さらには「制度信仰」とも両立するものに思われた。一見些細なことに見えるが、これは政治を外在的なものと氏がとらえているのではないかと思わせる。これと関連して、今までの統合重視の研究に対する批判は理解できるが、結社の解放系のヴェクトルを強調するあまり、権力関係の分析が甘くなっているように思われる。「文明化のソシアビリテ」という概念にしても、帝国主義文化論で使われる「文明化の使命」というタームとの関連性が明確になっておれば、もっと深みと広がりがあったのではないであろうか。

三点目に一九世紀のカトリックの歴史についてである。直接分析されているのが世紀転換期の社会カトリシズムであるためもあるが、カトリックが共和派や左翼のアソシアシオンを模倣し、共和主義を受容したという図式で描かれているような印象を抱いた。しかし、槇原氏もよく承知していることであろうが、フランス革命直後から始まるカトリックの「近代社会」への対応の歴史を考えると、事態はもっと複雑な様相を帯びていたはずである。関連して、カトリック聖職者が指導する結社と共和派の結社との質的な異同をどうとらえるのかは残された課題であろう。もちろん、私自身もカトリック結社が共和主義を根づかせることに貢献したことを否定はしない。だが、これは二〇世紀の共和主義の評価に関わっており、さらに検討する必要があるのではなかろうか。

もっともこうした疑問が生まれるのも、槇原氏が一つ一つの論点に対して、自分の主張を押しつけるのではなく、氏の議論とは対立する研究者の意見も相当慎重に紹介しており、開かれた形で議論を展開しているからである。文章の端々に実証に裏打ちされた自説への自信も感じられる。もっとも、もう少し踏み込んで日本の研究者に論争を挑んで欲しいところもあったが、慎重な槇原氏の気質には似合わないのであろう。

誤読、誤解は多々あるものと思うが、ご寛恕を願いたい。

（A5版　二八六＋三二頁　二〇〇二年二月　刀水書房　六六〇〇円）

（龍谷大学法学部教授　　）